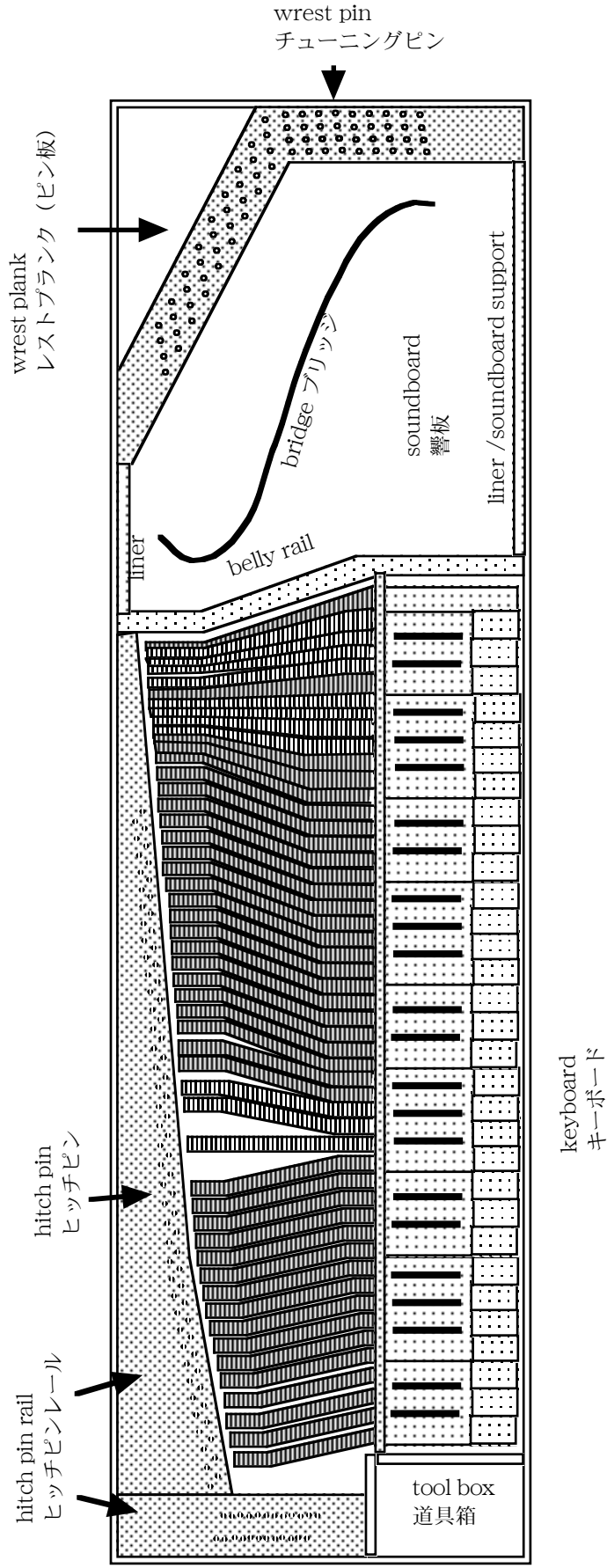


2004年7月6日 大塚直哉クラヴィコードリサイタルに寄せて



響板は透過として描かれている。  
Soundboard is drawn transparent.

### (クラヴィコードの構造と特徴)

クラヴィコードは、キーの奥に取り付けられた金属片で弦を突き上げ、そのショックで弦が振動し、その振動を響板上のブリッジで拾って、音にする鍵盤楽器です。ピアノではキーを押すと、ハンマーが弦をたたきます。また、チェンバロでは、キーを押すと、小さなつめが弦を弾きます。これに対し、クラヴィコードでは弦を突き上げた金属片（これをタンジェントと言います）はキーを押している間、弦を突き上げています。つまり、このタンジェントは弦振動の一方の支点になっているのです。この事が他の鍵盤楽器との様々な差異を生む事となります。キーから指をはなすと、キーは戻り、タンジェントが弦から離れ、弦振動の支点が無くなりますから、その振動は止みます。正確に言うと、タンジェントの左側にあるフェルトによって、振動が完全に止められます。この様に、クラヴィコードにはピアノやチェンバロの様なアクションが無いために、キーを押している間、指はキー、タンジェントを介して、弦と間接的に触れているため、弦振動が指まで伝わって来ます。クラヴィコードでは、一音一音適確なコントロールで弦を突き上げないと、よい音がしません。また、弦を突き上げた後、同じ重みでキーを押していないと良い音が持続しません。どれくらい強くキーを押して良いかも、楽器によってまちまちです。つまり、楽器の構造やその楽器の能力を良く理解して弾かなければ良い音がでないのです。（この点については弦楽器に似ているかもしれませんが。）クラヴィコードが繊細な楽器と言われるのは、この様な構造上生まれてくるものです。キーを強く押すとピッチがわずかに上がってしまいますが、これの応用として、さらに重みを増やしたり、減らしたりしてピッチをわざと上下させるベープンクと呼ばれる技法も可能です。ベープンクが積極的に用いられるのは18世紀後半になってからであり、楽譜にその指示が書かれているものもあります。ベープンクをかけないまでも、ピッチはキーの押し加減によって変わってしまうので、チェンバロの様に固定的ではなく、常にわずかに揺らいでいます。

### (クラヴィコードの起源)

クラヴィコードの生い立ちについて語るには、長い歴史を有する実験器具、モノコードの存在を避けて通れません。モノコードは2つの駒の間に1本の弦が張られたシンプルなものです。弦の一方は固定された駒ののっていますが、もう一方は移動式の駒となっていて、この駒を移動して、弦をはじくことにより、様々な音程が出せるというものです。弦は同じ張力であれば、弦の長さが半分になると、1オクターブ高くなり、3分の2になると5度（ドに対してソの音程）高くなり、また、4分の3になると4度高くなる。このように整数比で取ると純正音程が得られます。平均率のピアノやオーケストラとあわせる時でも、バイオリンやチェロは各弦の音程比5度を純正に調律しているのをご存じの方も多いかもかもしれません。平均率の5度と純正な5度の差はわずかです。しかし、純正な4度や5度のくり返しによって得られる12音は誤差が蓄積し、必ずしも使い良いものではありません。そこで、鍵盤楽器のための調律法なるものが必要になってきます。しかし、現代の様に何Hzあるいは何セントという様に、機械で計る事は容易ではありませんでした。そこで登場するのがモノコードです。上述の様に、各音を表すための弦の長さの比、あるいは弦の具体的な長さを示せば調律法を表す事ができます。1621のプレトリウスの著書シンタグマムジクムでもモノコードを紹介しており、弦全体を48等分する絵が描かれています。分数比で何段階かに分けて各音の位置を細かく指定していく、ということがモノコード上で行われ、この方法で調律法が記述されました。つまり、モノコードは調律法を表現し、実際に音をだして音程を確認するという大変便利な手段だったのです。

### (クラヴィコードの誕生)

さて、ある音を出すために、そのモノコードの、駒をある位置へ動かしてはじく、という動作はちょっと厄介ですが、これを画期的な方法で解決したのが、モノコードに、今で言うクラヴィコードの鍵盤を付けたものでした。これなら、一本の弦を調律すれば、欲しいすべての音程が何度でも、容易に出てきます。これを英語ではkeyed monocordと呼んでいます。15世紀になると、弦が数本張られ、いくつかの音が同時に出る様になり、音域は2オクターブあるいはそれ以上となって曲が弾けるようになりました。それでもモノコードと呼ばれていました。これがまさにクラヴィコードです。この頃（15世紀）クラヴィコードという言葉も登場します。ただ、国によって異なりますが、15世紀以後も、クラヴィコードの事をモノコードと記述している事が多いです。なお、現存する古い楽器としては16世紀に作られたものが、おそらく世界で5台あります。ちなみに、17世紀のものは数十台、18世紀のものは400台くらい、19世紀のものもまた、数十台、現存します。クラヴィコードはヨーロッパほとんどすべての国で使われていたと思われませんが、18世紀になると主として、ドイツとその周辺国、北欧、あるいはイベリア半島で使われるようになります。イベリア半島から、南米に伝わって、南米の各国で作られた楽器もあるそうです。音域はその時代の要求に合わせてだんだん広がっていきます。

なお、チェンバロもクラヴィコードと同じ頃か、少し後で誕生したと考えられますから、かなり長い間、鍵盤楽器として、オルガン、チェンバロ、クラヴィコードが共存していた事になります。オルガンを弾くにはフィゴ手を頼まなければならないので、長時間練習したり、作曲に長時間使うのは多少困難を伴いました。どこへ

でも持って行く事ができ、誰の助けも借りずに弾く事ができるクラヴィコードは作曲、編曲、練習の場面で大変重宝であったと思われます。

(本日使用の楽器について)

今日使用します楽器は1780年台にドイツの製作家フーベルト (Christian Gottlob Hubert) が製作したいくつもの大型の共有弦タイプのもを原形として作られました。共有弦とは複数のキーで、例えば、ドとド#のキーで、同じ弦を使用するという意味です。ド#キーはドのキーよりも右にありますから、ド#キーのタンジェントが弦を突き上げると、下図の様にブリッジまでの距離は、ドのキーのタンジェントが突き上げた時より少し短くなります。ギターのフレットの様に、同じ弦のちょうど半音高くなる位置を突き上げれば良いのです。この様に最大2つのキーで同じ弦を使用するものを double fretted と呼びます。最大3つのキーで共有するものは triple fretted と呼びます。クラヴィコードは、もともと、もっと多くのキーで弦を共有するもの (multiple fretted) として登場しました。前述のように Keyed monocord は最初は1本の弦を複数のキーで共有し、突き上げる位置の違いだけで音階を出す物でした。ちなみに、共有せず、キーそれぞれに専用の弦を持ったものはおそらく18世紀になって登場し、だんだんと数が増えていきました。このタイプは unfretted と呼ばれます。

フーベルトのクラヴィコードはキーの支点 (balance pin の位置) があまり手前でなく、中央付近にあるため、あまり、ダイナミックさは求められないものの、当時の楽器のなかでは、弾きやすく、微妙なニュアンスを付けやすかったものと思われます。また、フーベルトは前述の double fretted のクラヴィコードを多く作りました。共有弦にすると、楽器全体の弦の数が押さえられるため、楽器を軽く作る事ができます。また、共有弦と言っても、double fretted であればシャープキーがその左右どちらかのナチュラルキーと同じ弦を使う事になりますが、同時に弾かれる事はまれですから、演奏者としては、共有している2つのキーをあまりレガートにしない、という点に注意を払う事になります。また、18世紀においては double fretted の楽器では、どのキーとどのキーが弦を共有しているか、はある程度固定化してきますから、気を付ける場所も特定されて来ます。fretted のクラヴィコードについて、付け加えて言うならば、ナチュラルキーと弦を共有しているシャープキーは専用の弦を持たないので、調律しなくても良い、という事になり、初心者や、すぐ弾きたい人にはまことに便利です。

私は、エジンバラのラッセルコレクションにフーベルトの楽器があると聞き、1998年にイギリスを訪れた際、友人2人と見に行きました。水曜日しか公開していないとの事だったので、9月9日(水)に予約して訪ねました。クラヴィコードは弾くのが難しく、また、音はとても小さい楽器だと思っていましたが、フーベルトの楽器は大変弾きやすく、音も普通の部屋では十分であり、それどころか響板から音が豊かに立ち上がりました。この時の感動が、楽器をさらに良くしようとする今日の活動の原動力です。また、この日にフーベルトの楽器の前で、オランダから楽器を弾きにいらしていた大塚直哉さんに初めてお会いしました。

(音楽の隠れ家について)

「音楽の隠れ家」は気軽なクラヴィコードのミニコンサートとして、大塚直哉氏によって2002年2月に始められました。始めてみると、クラヴィコード奏法についてのレッスンもしてほしい、との要望が相次ぎ、4月に行われた第2回より、ミニコンサート後に希望者が交代でレッスンを受けるワークショップが設けられました。このワークショップ受講者は増加の一途をたどり、現在、3時間半ほどかけて、10人ほどの方が受講されています。また、このワークショップは最後まで、熱心に聞いている受講者が多い様です。また、受講者はピアノを弾かれている方が一番多く、次いでオルガンを弾かれる方、それに新世代とでも言いましょうか、チェンバロやクラヴィコードで音楽を始められた方です。現在、ミニコンサートの前にはプレコンサートと銘打った生徒さん等の発表会があり、器楽アンサンブルや、歌もあり、楽しいものになって参りました。

